

2022・3・18

災害と女性

水俣市よりそいサポートセンター

女性相談員 松本周子

はじめに

- ◇ よりそいサポートセンター
 - 配偶者暴力相談支援センター
 - 性暴力相談支援センター
 - 女性相談員

- ◇ 女性相談員について
 - 根拠法
 - 婦人保護事業が対象とする女性
 - ソーシャルワーカーとしての業務

1 近年経験した災害

- ①阪神・淡路大震災（1995年1月17日）
- ②水俣市土石流災害（2003年7月20日）
- ③東日本大震災（2011年3月11日）
- ④熊本地震（2016年4月14日、4月16日）
- ⑤芦北・人吉豪雨災害（2020年7月3日・4日）

2 被災した女性相談員の声

- 熊本地震を経験した婦人相談員
- 厚生労働省のアドバイザー派遣事業
- 熊本の婦人相談員のアンケートを中心に
阪神・淡路大震災・東日本大震災の婦人相談員の経験を通して
災害時の相談対応ハンドブックの作成
- 全国で開催されたハンドブック研修

災害時の相談対応 婦人相談員ハンドブック



全国婦人相談員連絡協議会

(1) 災害直後の相談対応

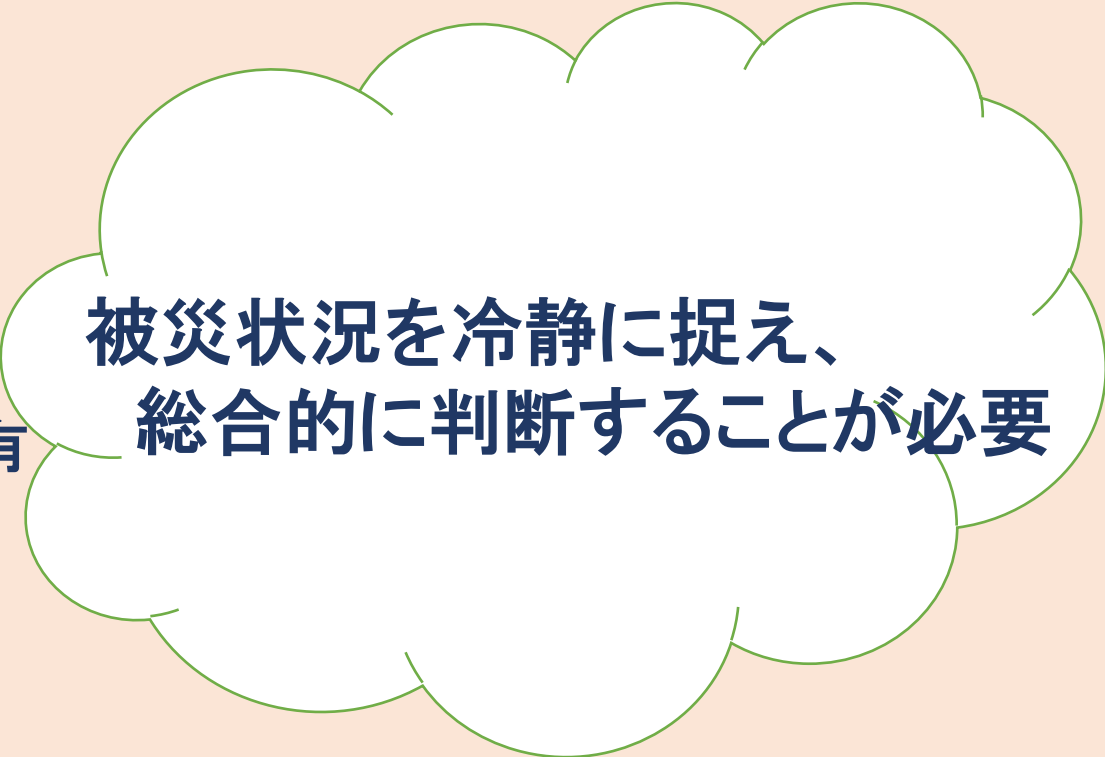
①相談員の状況

②相談者の状況

③相談員の対応

④震災時の不安要素

⑤関係機関との情報共有



被災状況を冷静に捉え、
総合的に判断することが必要

①相談員の状況(アンケートから)

- 予告の告知があったので、相談者に「お子さんを抱っこして外に出ましょう」と言ったが、相談者は動こうとせず、夫のことを語っていた。他の職員が子どもを抱いて外に出てくれた。私は彼女を何とか外に連れ出した。他の職員も手伝ってくれた。
- 相談対応中地震があり、揺れが強くなってきたため、相手の了解の元、相談を中止し、より安全な場所に誘導した。
- 関係施設の利用者や建物の安否確認。来所相談中の利用者の安全確認と、帰宅方法を検討した。
- 業務中のときは、相談を中断させる決断力と勇気が必要だと思った。

- 地震以降、避難所や車中泊をしたが、どれくらい泊まったか覚えていない。
- 事務所で夜明かしし、翌日帰宅。
- 待機命令が出ていたため自宅に帰れず、翌日帰宅。
- 交通機関が麻痺したため、自己判断で待機。待機中、帰宅困難者対応が生じたため、区民対応を実施。電車の開通を待ち、深夜帰宅。
- 震災後、子どもの保育所や学校が1ヶ月休みになったが、大人は通常業務なので、実家に子どもを預けた。
- 震災時、すべてのライフラインが止まり、寸断された道路は自衛隊員の瓦礫撤去作業により、車一台がようやく通れる程度。震災直後は相談が少なく、庁舎の全壊などにより仮庁舎で支援物資の仕分け、被災者の安否確認の問いあわせ対応などの作業にあたっていた。「生きることが先！相談どころではない。」という言葉が印象的だった。

②相談者の状況（アンケートから）

- 夫の暴力から逃れるために夫に内緒でアパートを借りていたが、そのアパートが全壊した。
- DV加害者から逃げていた相談者が避難所で加害者に出くわし、今の自宅に戻れない状態となった。
- 大きな震災の後は、相談を遠慮してしまうこともある。
- 大きな震災は、直接的な被災者でなくても精神的影響を受けるため、家族関係に問題が生じるケースが出てくる。
- 精神障害の方は、動揺が大きかった。
- DVケースで入所調整していた所に、地震で動転した本人が、加害者からの電話に出て居場所を言ってしまった。
- 震災の不安で、自ら加害者に連絡を取り元に戻った。
- 津波で流されようとしたとき、手をつかんで助けてくれた命の恩人という思いで、入院するほどの暴力を振るわれても加害者の夫のもとに戻る被害者がいた。

③相談員の対応(アンケートから)

- 相談員としては大きな影響はなかったが、精神的な疲れはあった。当時、支援物資の移動や避難所のお手伝いをする中で、人の暖かさと震災の大きさを感じた。
- 地震直後、しなくてはいけないこと、してはいけないことは何か、いつでも活用できるような情報収集方法の工夫が必要。
- 断水が続く中、日常に近い生活を目標にして、勤務を続け、無我夢中だった。
- 家族が無事か、自分が無事に帰宅できるか心配だった。
- 家族の安否、留守宅で家具などが転倒散乱していないか等、個人としてのことを心配するのか先になっていた。職業人としての態度、行動が後回しになってしまった。

④震災時の不安要素(アンケートから)

- 自分のことを考える余裕がないことが良かったので、仕事に出ていたが、仕事が終わると心細くなった。
- 目に見えた被害がなくても、実際はニュースの映像等を見て涙が出る。
- テレビ等で震災の情報が伝えられるときは、すぐにテレビを消した。いろいろ聞かれるのも嫌だった。涙が出たり、左手があげられなくなったりした。
- 避難所に身を寄せた。始めはおにぎり 1 個に長蛇の列。水を 2 人に 1 本をと「1 人はダメ」と言われたことが胸の痛みになった。一生忘れない言葉になった。
- 自宅は大丈夫だったが、道を挟んですぐそばの家が沈んでいくのを見た（液状化）。

⑤各関係機関との情報共有

震災後は、情報が錯綜する中で、被災状況の確認、各関係機関との調整が必要。

事前に危険性の高いケースをリストアップ、震災後の相談者の安否確認や置かれている状況を把握しておくことが必要。

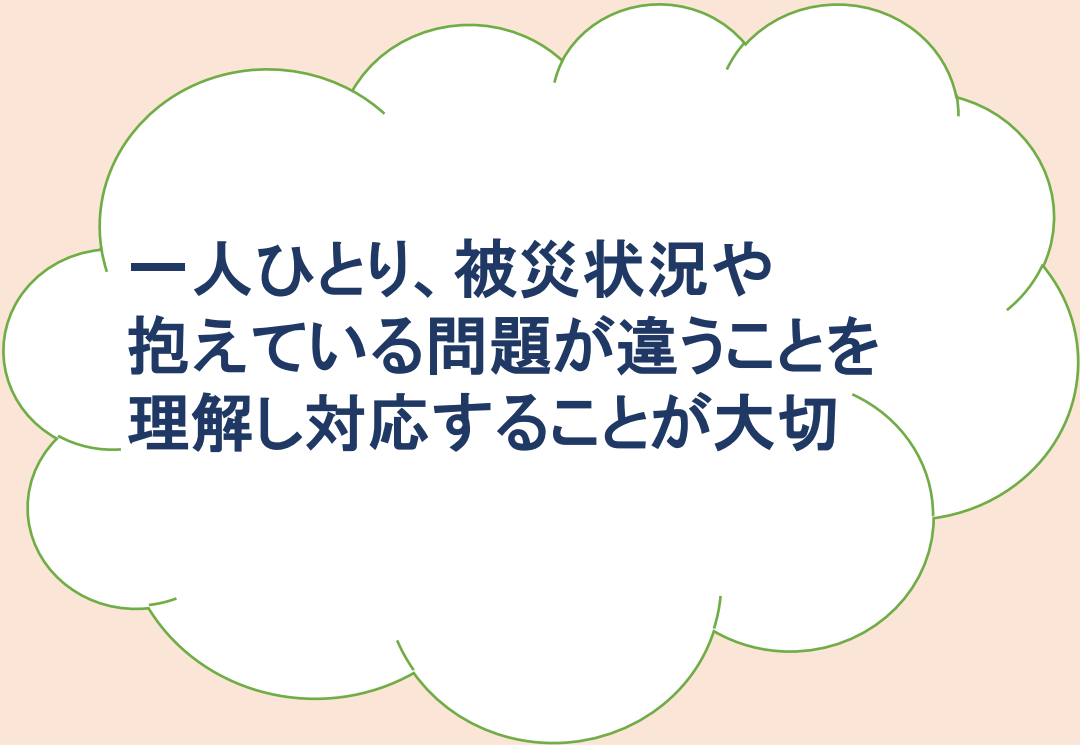
(2) 時間経過による対応と支援

①3ヵ月後

②半年後

③1年後

④数年後



一人ひとり、被災状況や
抱えている問題が違うことを
理解し対応することが大切

①3か月後(アンケートから)

- 大きな被害を受けた地域の相談員は、被災者でありながら相談員として何ができるか思い悩んだと聞いた。家族を亡くした人に声をかけられないなど。
何とか支援をしたいが「今、何が役に立つのか」と多くの人が多かさと無力感を感じていた。

②半年後(アンケートから)

- 相談員自身が震源地に居住していることから、震災における支援体制や被災地の状況に共感しやすく、町からの広報にも目を通していたため、情報提供出来ることが多かった。
- 震災により、住宅や家財等打撃を受けたが、半壊にも至らず、公的支援も受けられない、パート収入で等でぎりぎりの生活をしていたため、貯金もなく、生活困窮になるなどの経済的な相談が増加した。
- 震災から半年間、DVの相談件数や保護件数が減少した。他の事務所も同じだった様子。シェルターも多数空いていた。
- 地震が落ち着いてきた頃に「実はこういうことがあって」という内容の相談があった。直後は、命の危険がある状況と比べ我慢をしなければならないと思い、どこにも相談できずに抱えてしまったことで解決できない状態に至ってしまった。

- 震災半年後より、夫婦関係や親子関係等、元々の問題が表面化し、家族関係を見直すきっかけにされた相談者が多くなったように思う。
- 震災を通し、自分に大切なものや行き方を再考され、以前から暴力のある夫から決別を決めた。
- 震災半年後から、避難先で夫のDVやアルコール問題が悪化し、離婚やシェルター避難を考えているとの相談が寄せられた。これまでは、夫が仕事に出ていて、夜間のみ気を付けていればと耐えていたものが、夫が職を失い、一日中暴力、暴言にさらされているのは耐えられないという状況だった。
- 不安を訴える人や不安定になる人の相談件数が増えた。

③1年後の相談者(アンケートから)

- 県内の12ヶ所のDVセンターの相談件数は、前年度比、124.7%と増加した。
- 相談者に電話すると、今後の生活や就労の不安はあるものの、相談したことで少し安心される様子が伝わってきた。
- 精神的疾患のある子どもが「地震が怖い」と親から離れず不登校になったケースがあったが、心のケアを早期に行うことにより回復した。
- 震災が家を出る一つのきっかけになったと話していた。
- 生活費絡みの相談が増加。義援金や補償金で生活しているが、今後の生活保障について等、震災で失職している被災者の相談も急増した。
- 避難所生活で他の家族生活が見え、客観視することによりDVに気づく被害者もいた。

相談員(アンケートから)

- 被災当時は頑張って気を張っていたが、1年が経って体調を崩した人が多数いた。
- 家の中にタンスが2つあるが、少しずつ壊れて行くので、自分のような気がして、2週間前にタンスを捨てて、新しく買った。自分でエネルギーを貯めていかないといけないなあと考えている
- 建物の耐震の関係で庁舎を分散することになった。震災によって職場の環境が変わった。震災後を体験して普通に生活できることへの感謝の気持ちが高まった。
- 相談員自身もまだ震災に対する恐怖がある。1年経ったが、久しぶりの揺れには不安が募った。

④数年後・相談者(アンケートから)

- ・ 直接震災を受けていなくても、震災により仕事が減ったり、実家や家族の職場環境が変わった
- ・ 精神的に不調となった。
- ・ 震災をきっかけに、離婚を前向きにとらえ、DV避難をしたいとの相談があった。
- ・ 避難予定だった女性を取りやめた。
- ・ DVで別居していたが、震災後心細くなり、夫に連絡を取り同居を始めた。
- ・ 震災2年後、DV相談、失業、生活困窮、失業などによる夫婦関係や家族関係の変化と精神的不安がある。
- ・ 直接被災していない方は、実家が被災して頼れない、被災した実家から支援を求められ生活が困窮することもある。
- ・ 震災から4年、この間復興に大きな格差がみられる。みなし仮設に住んでいる人の中には、住まいのみならず、生活のあらゆる面で悩みが複雑化してきていると感じる。

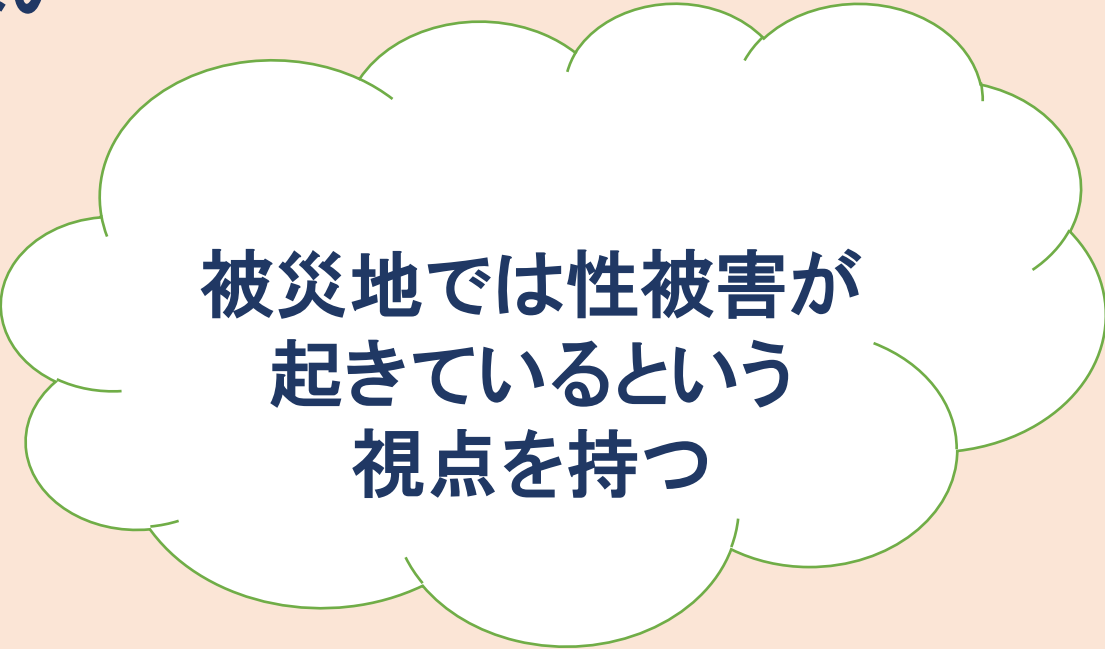
相談員（アンケートから）

- ・ 震災直後、影響はなく通常業務を行いました。その後の研修会に参加することにより、地域の被災状況を痛切に感じ、災害時における相談員の身体的精神的な負担を考え、緊急時の相談員相互支援体制の必要性を感じた。
- ・ 家族関係に関わる悩みが多かったと感じた。家庭を維持するために、様々なことを一手に引き受けている女性の苦しさなどの感情に寄り添う相談はこれからも必要だと感じている。
- ・ 生活再建が進む中で、深刻な労働問題の相談件数が増えて生きている。会社の相談窓口があっても対応してもらえない、二次被害に遭い救いを求める、身近に相談先がないことなどから、地域における充実した対応が求められる。

- 震災と女性の問題、これは災害時でなくても女性の抱える問題、弱い部分が浮き彫りになったと思える。
- 女性は人災にもあってしまう現実、報道されずに何が起きているかも分からない現実、女性の参画の必要性を感じた。
- メディアでは、助け合う場面が多く流れ、違和感をもっていました。また相談員として、女性として、一人の人間として、実際関東で震災がおきたら何ができるだろうという気持ちが沸きました。一人で頑張らない、抱え込まないことを大切にしたいと思う。
- 震災後、生活の変化が大きく、今も続いています。夫の実家は半壊、自宅は一部損壊と家屋の被災に伴い、経済的な出費も大きかった。義母との同居生活が始まり、戸惑いや悩むことが多くある

3 被災地での性被害

- ①避難所での体験
- ②避難所での性被害
- ③暴力を見過ごさない



被災地では性被害が
起きているという
視点を持つ

①避難所での体験(アンケートから)

- 避難所に専用の着替える場所がなかった。高校生の女子は、「着替えは毛布にくるまってやっている。不審な男性に声をかけられ怖い思いをした。」と話した。
- 授乳期の赤ちゃんを抱える母親は、隠す場所がない中で、毎日、見られるのを覚悟して授乳した。プライバシーはない状況だった
- 怖くて夜間、一人でトイレに行けなかった。どうしても我慢することが多く、トイレも流す水を汲みに行くことや、紙類を流さないようにするために、臭いも充満した。
- 入浴施設も簡易施設が準備されても一人20分以内で体を洗う、髪を洗う程度で入浴できる状況はなかった。生理用品、おむつ、下着類から化粧品、鏡、常備薬等、日常の当然あるべきものを失い、求める困難さを体験した。

- 段ボールで仕切られた空間や子どもの泣き声等、プライバシーのない中で動ける範囲も限られると次第にストレスが極限状況に達して行った。
- 支援物資の受け取りも女性に関する用品、必需品はスタッフが男性ばかりだと受け取りにくかった。
- 洗濯した下着を干す場所がないと特に女性から意見が出た。

②避難所での性被害(アンケートから)

- トイレに夜間、行く時に暗いところに連れ込まれそうになった子ども（女子）がいた。
- 授乳中に男性からじっと見られているのを感じ、怖かった。
- 夜間、寝ている時、誰かに身体を触られた。
- 段ボールの仕切りの上から、着替えをのぞかれた。

* レイプの被害もあった

③暴力を見過ごさない

災害で被災者は、やっとの思いで非難した場所で、セクハラや性暴力があると安心、安全を失い、明日の不安につながります。生存権にも関わるので、暴力を容認しない環境が大切である。

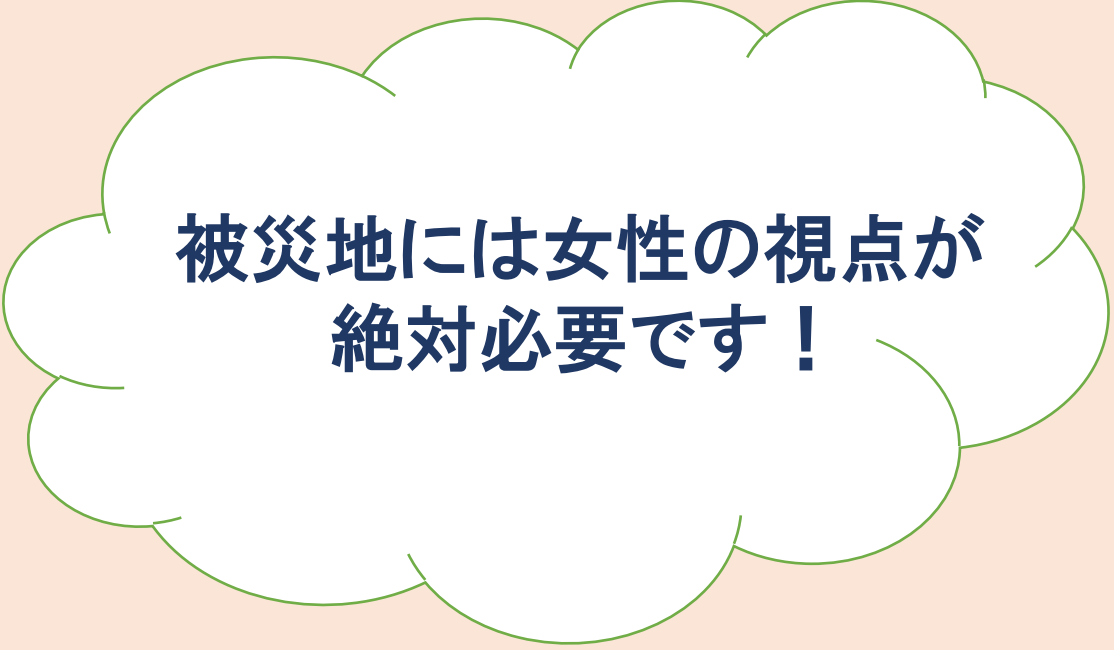
避難所や仮設住宅の組織作りの中で、リーダーや身近な世話人に訴えていくことが可能な体制が求められる。被害者が逃げるのではなく、加害者を許さない、暴力を発生しない体制作りが原点である。

特に相談場所や相談体制の不備が、入口からつまづきを感じさせ手はいけない。身近なひとからの被害、あるいは共用場所やグループ・組織・管理体制にあっても、予期しない危険に遭遇することもある。

「あなたの相談は、誰にも知られることはありません」守秘の絶対的信頼性こそ、重要です。今後の事と一緒に方法を考えていきます。

4 女性のための災害時支援と対策

- ①女性の為の災害対策
- ②復興計画に女性の視点を



被災地には女性の視点が
絶対必要です！

①女性のための災害対策

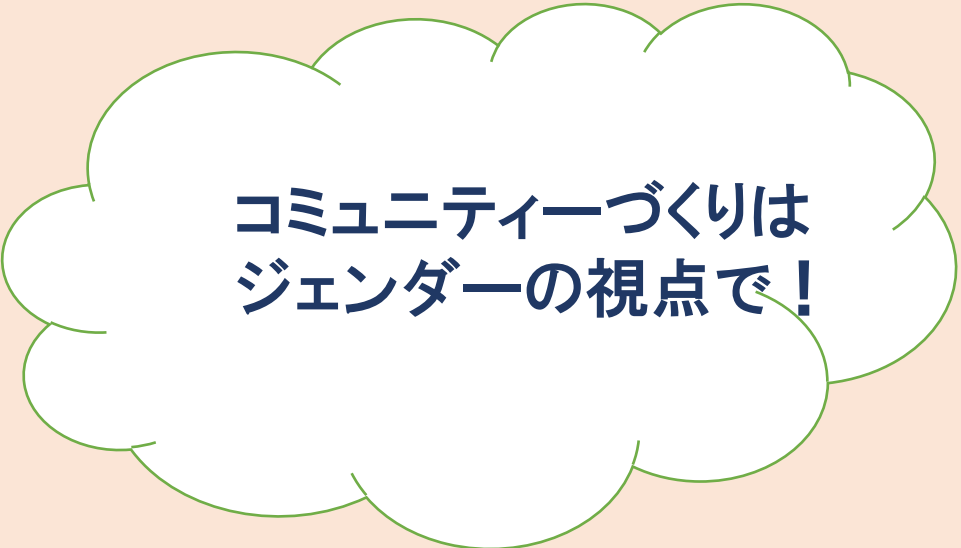
- 1 男女共同参画の視点から避難所をチェックする。
- 2 具体性をもって考える。
- 3 女性視点の必要性
- 4 避難所の開設・運営管理・衛生・保健
- 5 女性防災リーダーの育成
- 6 女性向け防災セミナーの実施
- 7 自主防災組織—男女共同参画の視点

②復興計画に女性の視点を

- 障がいのある人、妊産婦、病人、高齢者、子どものニーズを理解したサポート体制
- 女性の地域防災リーダーや災害復興アドバイザーを養成し、地域に住む人々の支援体制の中で活躍できる環境をつくる。
- 女性の視点に配慮した避難所運営マニュアルの作成をする。
- 避難所や仮設住宅の運営に女性の参画が必要である。
- 防災・災害復興対策の意思決定の場に女性の参画や責任者として存在する

5 地域とのつながり

地域の防災力として自助・共助・公助の役割がある。災害発生、直後には、住民と地域の人が互いに助け合う共助による災害対策が重要になる。地域活動の中心となる地域防災リーダーの役割が大切で、女性のリーダーの視点が求められ、必要である。



コミュニティづくりは
ジェンダーの視点で！

6 「女性に対する暴力防止」を 防災・復興計画に

- ① ライフライン復活対策や対応と同じようにDVや虐待が発生しないように家族支援や社会の見守りを広報し、具体的支援をする体制をつくる。
- ② 保健師・保育士・女性相談員のいる相談場所と共に、意見や実情が、生活場所のリーダーと直結することである。
- ③ 電話・面接相談場所の開設や災害時の一時保護施設・強姦救援センターが通常施設以外にも設置される。
- ④ 夜間の街を明るくし、人々を犯罪から守る、女性たちを性暴力から守るためにも特別警戒する。性暴力被害者を出さないように

⑤性暴力被害者が、責められることなく訴えることができ、支援されるシステムを作る。

⑥問題を抱えている個人・家族のプライバシーが守られる権利擁護・アドボカシーの視点が大切に扱われる災害時支援体制の組織化が望まれる。

7 ハンドブック研修後の 婦人相談員の声

- 女性のみ入所できる避難所が欲しい
- 避難所の中に駆け込み的な機能がある所があると、性被害対策になるのではないか
- 普段から意識しておくことが大切
- 今まで自分の事として考えていなかった。これは自分の事なんだという意識に変わりつつある
- まだ、阪神淡路のトラウマを抱えていることに気づきました
- 災害時は、皆がつらくて、皆が苦しい。その中でセクハラ被害を受けた女性は声を上げにくい。アウトリーチができる環境を作りたい

- 女性視点からの避難所つくりを考えていきたい
- 災害時に女性の視点があることで減らせる被害があると思った
- 女性のプライバシーは思ったより軽視されていると感じた
- 防災のために今からできること、災害時の心構えについて考えたい
- 課題を整理し、行政との連携、地域との連携に役立ていけるようにしたい（トイレの設置、相談窓口のPRなど）
- 災害時に必要な心構えは、日常の相談の際にも役立つものであることがわかった。日頃から自分と相手の「安全・安心」「無理しない、させない」ということをこころがけていきたい

厚労省派遣事業から

村本邦子教授のアドバイス

- ・ 知識があっても自分の体験レベルにないと活かせない。自分の体験を振り返ってみることが大事。
- ・ 災害などの危機状態では、日常と違う緊張状態、ハイな状態が続く。そのことが日常あった小さな問題を大きくしてしまうことがある。深い呼吸をしてみよう。
- ・ 支援者は、自分の事は後回しにしがち。相談者や家族への配慮や世話に手いっぱい、自分のことが最後になってしまう。そんな時こそ、意識的に私の声に私が耳を傾ける。疲れていないか、自分はどうしたいのか、どうしてもらったら嬉しいのか、耳を澄ますことが大事。自分の声が聴けなければ、他者の声も本当には聴けない。

- 個別の例を見るだけでなく、コミュニティの災害として全体を大きく見てみることも大事。
- レリジエンス、つまり地域のもつ力に眼を向け、その力を活性化することを考えてみる。
- ひとつには、身近な人たちとの助け合い、つながりが大きな支えとなる。一人で頑張らずに助けを求めよう。困った時に何でも自分で頑張るのではなく、上手に助けを求めることができる支援者こそ、本当の意味で良い支援者となれる。
- 子どもたちのことに目を向けていく必要あり。大人たちが大変な時期、子どもたちは、大人に心配かけないよう我慢したり、大人を支えようとするものである。危機状態を過ぎ、安心できる状況になると子どもたちに影響が現れる。DV被害等でも同様。子どもは無理しているかもしれない。あるいは、黙って大人の言動を見ているかもしれない。余裕のある人が子どもの世界にもほんの少し思いを馳せられるといい。

今後に向けて

- 岩手県釜石市の女性リーダーの活躍した避難所は今
- 絵空事にしないで必ず実行できるように備えをおこなう
- ポスターの活用

避難所、避難先での 性暴力・DV（配偶者からの暴力） で悩んでいませんか？



婦

ひとりで悩まないで！

相談窓口

女性相談員に相談してください。

水俣市よりぞいサポートセンター

0966-63-2738